

チームスポーツにおける集団規範

— 特にバレーボールについて —

Consideration about the Group Norm in team sports.

— About the Varsity Volleyball Players —

遠藤俊郎*	下川浩一†	安田貢‡
ENDO Toshiro	SHIMOKAWA Kouichi	YASUDA Mitsugu
布施洋†	袴田敦士†	伊藤潤二†
FUSE Hiroshi	HAKAMATA Atsushi	ITOH Junji

要約: 本研究では、大学における運動部活動(バレーボール)の練習場面における現代の集団規範の実態を把握するとともに、競技水準によってどのような違いがあるかを明らかにし今後のコーチングに役立てるための一資料にする。また、10年前の選手の集団規範と比較することによって今日の選手の特徴を明確にすることを目的とした。その結果、男子における集団規範下位尺度得点において、競技水準の高いチームに所属している選手が競技水準の低いチームに所属している選手に対してすべての下位尺度得点で高い値を示した。男子における社会的アイデンティティ各項目得点においては、競技水準の高いチームに所属している選手が競技水準の低いチームに所属している選手よりも高い評価が得られた。このことから、男子において競技水準が高いほうが集団帰属意識は強く、規範も厳しいことが示唆された。また、90年代と現代の集団規範の比較においては、「現代の選手」が3つの下位尺度得点(態度規範・上下序列規範・奉仕規範)で高い値を示した。このことから「現代の選手」において規範に対する耐性が低下している可能性があることが示唆された。

キーワード: 集団規範, 社会的アイデンティティ, バレーボール, 大学生

I 緒言

集団スポーツでは、従来から集団としてのパフォーマンスの向上に様々なアプローチを試みている。連係プレーなどの技術的側面のほかに、集団としてのまとまり、チームワークといった精神的側面にもかなり強調点を置いている。体力や技術にすぐれていても、チーム内の選手間にまとまりがないと、試合に負けてしまうケースはよく見られる。チームが集団として機能するために最も良い状態にあることが、最も良いパフォーマンスを生み出すと考えられる。さらに山岸(1975)は、「指導者はチーム内のまとまりについては、技術の指導以上に考慮しなければならない。このチームのまとまりについては、いろいろな面から検討されているが、まだはっきりとした定説は見出せない。特にスポーツ集団の場合は、勝敗はもとより集団の維持・発展にも大きく関係しているので、おろそかにできない問題である」と集団のまとまり：凝集性に関する研究課題を指摘している。

ところで、個人が集団の構成員として他成員との間に一定の社会的関係を営んでいる場合、集団所属性を持つという(蜂屋1979)。集団活動にとっては成員が集団に単に社会的に所属しているだけで

*保健体育講座, †教育学研究科修士課程, ‡医学工学総合教育部博士課程

はなく、集団への強い愛着を持つようになることが重要で、これは集団凝集性を高める1つの重要な要因である。高凝集性集団では集団規範がよく順守され、またそれが成員によって内在化されやすいが、江幡(1983)によれば、高凝集性が高い集団生産性を示すとは限らないとしており、加えて青柳(1980)は、「高凝集性が高生産性と結びつくためには、集団目標の達成を指示する方向での集団規範が存在していなければならない。というのは、集団をある望ましい状態へと方向づけ、その方向への集団活動を促進するものである集団目標とは無関係ないしは否定的の方向をもった集団規範が生じることがしばしばあるからである」と集団の凝集性と集団規範の関連性を述べている。

さらに青柳(1980)によれば、小集団の理論的見地からみれば、集団には、コミュニケーションを媒介として集団斉一性を求める圧力が集団内成員に働くとされている。集団とは各成員間相互に心理的相互交渉が存在し、かつ、集団としての目標が確立されて、集団目標に向かって集団が集団として活動しているものである、との規定に従う。とすれば、各成員間に集団内の斉一化された行動様式、考え方が生じることになる。これは凝集化の過程とみられるが、このような斉一化された行動様式等を「集団の規準」という。この集団の規準は、あらかじめ設定されているものではなく、集団が集団としての活動を開始した時点からの集団内成員相互のコミュニケーションによって、一定の方向に決められていくものである。すなわち、集団目標への接近のために、異なった意見、異なった態度などにより、ばらばらの行動を集団内で各成員がとれば、おそらく目標達成は不可能であろう。このことは、行動の規準を一つの方向にまとめられる力として、集団目標の達成への方向に成員各自に働く力が生じてくることとなる。このようにして生じた集団の規準は、集団内成員がこれを受容せざるを得ない圧力として働いてくる。集団の規準から逸脱しようとする成員や、全く異なった考えの成員達の行動は、目標達成の妨害となるものであり、彼らを集団の規準に従わせる方向に、彼ら自身に向かって働く。このような、成員達が集団の規準に従わせる方向に働く心理学圧力を集団圧力と呼ばれているが、この集団の規準と同じような意味で使用され、一般化されている用語に、集団規範がある。集団規範という場合、この集団の基準を含めて、集団内成員によって共有された判断の枠組みと考えられる(青柳1980)。

また、集団規範は成員が自分の置かれた環境を解釈し予測する助けとなり、肯定的な社会的アイデンティティを維持することができる。社会的アイデンティティは「社会的集団ないし社会的カテゴリーの成員性にに基づいた、人の自己概念の諸側面、およびその感情・評価その他の心理学的関連物」と定義される。言い換えると、アイデンティティのうち、集団ないしカテゴリーの成員性が個人のアイデンティティの中に取り込まれた部分であるということができ、この社会的アイデンティティが社会的状況における行動、特に集団間の行動に大きな影響を与えている(柿本1997)。阿江ら(2006)はスポーツ集団の社会的アイデンティティについての研究を行っており、競技成績が低ければ集団帰属意識も低下する傾向がある、と競技レベルとの関係性を述べている。また、スポーツ集団のアイデンティティを明らかにすることで、スポーツ集団の文化をとらえることができるとしている。しかし、スポーツ集団の社会的アイデンティティに関する研究は少なく、これまでとは違う観点で研究を進めることは有意義であると考えられる。

また、集団規範の決定に権限をもつ人によって集団の特徴に相違が見られる。丹羽(1980)は、規範が伝統であったり、指導者(監督・コーチ)が決められているチームを「部員外型」、指導者に加えて、キャプテン・マネージャー・上級者といった主要なメンバーが相談して決められているチームを「部主脳型」、指導者は加わらず、キャプテン・マネージャー・上級者といった主要なメンバーが相談して決められているチームを「部員内主脳型」、指導者は加わらず、部員全員で相談して決められているチームを「部員型」としている。このことから、集団の構造の違いによって規範にも違いがみられるか検討する必要がある。

さらに、「若者」について、1980年代には「新人類」といわれてきたが、現代では「新新人類」といわれるようになった。このような現代の若者についてコンサルティング情報誌「月刊シリエズ」編集部の吉田(2005)は「目標・目的意識がない。縦社会ではなく横社会」といっており、また元読売巨人コーチの屋鋪(2005)は自身のホームページで「新人選手は16年目の選手よりもハングリー精神がなく、闘争心がない」と1990年代と現代の若者の違いを指摘している。さらに河合塾講師の牧野(2003)は「若者のあり方、若者像そのものがこの10年間に著しく変化してきている」と報告している。近年若者のあり方が変わってきていることから、集団のあり方もかわってきているのではないかと考えられる。集団に関する研究は1980-90年に盛んに行われていたが、若者の質が変わってきている現代、比較という意味からも改めて研究することは有意義であると考えられる。

II 研究目的

本研究では、大学における運動部活動(特にバレーボールに着目して)の練習場面における現代の集団規範の実態を把握するとともに、競技水準によってどのような違いがあるかを明らかにし今後のコーチングに役立てる一資料を得ること、また10年前の運動選手の集団規範と比較することによって今日の運動選手の特徴を明確にすることを目的とした。

III 研究方法

1 調査対象

関東大学バレーボール連盟に所属している男女バレーボール選手1部(男子77名、女子64名)、2部(男子179名、女子48名)、3部(男子128名、女子95名)、7・8部男子210名の各部所属選手計801名を対象として、各大学の監督や主将に調査の協力を依頼し、承諾を得て調査用紙を配布し、1部(男子68名、女子56名)124名、2部(男子122名、女子30名)152名、3部(男子85名、女子80名)165名、7・8部男子74名の計515名の回答を得た。なお、回収率は64.3%であった。

2 調査期間

2006年10月14日～11月18日の間に調査用紙を配布し、回収を行なった。

3 調査方法

質問紙によるアンケート調査を実施した。

4 調査内容

本研究で用いた質問紙は、「社会的アイデンティティ尺度」「運動部の集団規範尺度」によって構成され、さらにこれにフェイスシートをつけて、『「チーム」という運動集団に関する意識調査』として実施した。

以下に4つの質問紙の内容ならびに調査方法を記す。

1) フェイスシート

フェイスシートとして、性別、学年、年齢、ポジション、経験年数、チーム内役職、運動経験、中高時の運動部の雰囲気、最高競技成績を調査した。

2) 運動部の集団規範尺度

金(1992)が作成し、挨拶などの上級生に対する下級生の態度を示す項目の「態度規範」因子12項目、部の目標達成、部の競技レベルを高めるための行動や感情に対する規範を示す項目の「業績規範」因子7項目、練習の準備、欠席などの運動部生活に関する項目の「生活規範」因子5項目、上級生が優先されたり、上級生と下級生の縦の関係を維持するための項目の「上下序列規範」因子4項目、下級生が上級生に対する奉仕に関する項目の「奉仕規範」因子3項目、計5因子31項目からなり、各項目の質問に対して「必ずしなければならない」(5点)、「それなりにしなければならない」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「まあまあ自由である」(2点)、「まったく自由である」(1点)の5段階で評定を求めた。

3) 社会的アイデンティティ尺度

大石(2003)が作成し、集団への同一視の程度を調査するための20項目を使い、「非常にそう思う」(7点)から「まったく違う」(1点)までの7段階による評定を求めた。

4) 規範決定者の調査

丹羽(1980)が示した「規範決定の権限からみた役割・地位構造の型と特徴」をもとにして規範の決定者を調べた。

5 結果の処理

本研究では、統計解析プログラム「SPSS 10.0J for Windows」によって結果の解析を行った。

IV 結果及び考察

1 男子競技水準別にみた集団規範尺度得点の比較

集団規範尺度について男子競技水準別とその全体の平均値を表1に示した。規範5因子を競技水準別に一要因分散分析を行った結果、すべての規範因子において有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表1のような有意な差がみられた。「奉仕規範」以外の4つの規範因子で3部<1部・2部という有意な差がみられことから1部・2部所属選手は3部所属選手と比較すると規範が厳しいことがわかる。二宮(1979)は運動部集団の中でも「伝統ある部」には、特有な集団雰囲気が内在し、この雰囲気が成員の行動に大きな影響を与えていると考えられると述べている。3部と比べ1部・2部には伝統のある大学が多く所属しており、規範が伝統の影響を受けていると考えられる。金(1992)は競技レベルが高いほどすべての規範において厳しい規範を持っていると述べている。今回の研究でも男子においては、1部・2部が7・8部に対してすべての規範因子において有意に高い値を示し、金(1992)の研究を支持するものとなったと考えられる。

表 1 男子競技水準別にみた集団規範尺度得点の比較と F 値

規範	点. () 内標準値					F 値	多重比較の結果
	全体 (n=314)	1部 (n=61)	2部 (n=112)	3部 (n=73)	7-8部 (n=68)		
態度規範	3.48(1.36)	4.04(1.17)	3.78(1.27)	3.18(1.27)	2.85(1.42)	147.44***	7部<1部・2部・3部, 3部<1部・2部, 2部<1部
業績規範	3.61(1.20)	3.90(1.13)	3.75(1.13)	3.41(1.14)	3.33(1.33)	26.37***	7部<1部・2部, 3部<1部・2部
生活規範	3.60(1.35)	4.09(1.13)	3.84(1.23)	3.40(1.36)	2.96(1.41)	53.04***	7部<1部・2部・3部, 3部<1部・2部, 2部<1部
上下序列規範	2.39(1.35)	2.75(1.34)	2.63(1.43)	2.10(1.16)	1.97(1.24)	24.89***	7部<1部・2部, 3部<1部・2部
奉仕規範	3.47(1.51)	3.55(1.63)	3.96(1.27)	3.46(1.14)	2.59(1.47)	38.93***	7部<1部・2部・3部, 2部<1部

*** $p < 0.001$ 1部:1部所属選手 2部:2部所属選手 3部:3部所属選手 7部:7・8部所属選手

2 女子競技水準別にみた集団規範尺度得点の比較

集団規範尺度について女子競技水準別とその全体の平均値を表2に示した。規範5因子を競技水準別に一要因分散分析を行った結果、「奉仕規範」以外の4つの規範因子では有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表2に示すような有意な差がみられた。「奉仕規範」に有意な主効果がみられなかった理由として、女子は男子と比べ生活上でのプライバシーを守り、自分でこなしてしまう者が多いのではないかと考えられる。また、1部は2部・3部に対して「態度規範」・「業績規範」・「生活規範」において有意に高い差を示したが、2部は1部・3部に比べ「生活規範」と「業績規範」で低く、「上下序列規範」では、逆に有意に高い値を示した。女子においては、競技水準との明確な関係は認められなかった。また、男子・女子においても「上下序列規範」の値が低いことがわかる。大学期では成員間の技能レベル差がより明確になるために、「上下序列規範」は緩くなっていくと考えられる。

表 2 女子競技水準別にみた平均集団規範尺度得点の比較と F 値

規範	点. () 内標準値				F 値	多重比較の結果
	全体 (n=160)	1部 (n=53)	2部 (n=29)	3部 (n=78)		
態度規範	3.06(1.41)	3.41(1.42)	2.82(1.31)	2.92(1.41)	30.88***	3部・2部<1部
業績規範	3.68(1.22)	4.12(1.05)	2.64(1.13)	3.76(1.22)	119.75***	2部<1・3部, 3部<1部
生活規範	3.51(1.39)	4.07(1.13)	2.66(1.26)	3.45(1.43)	56.02***	2部<1・3部, 3部<1部
上下序列規範	1.85(1.11)	1.85(1.11)	2.22(1.12)	1.71(1.07)	9.43***	3部<2部, 1部<2部
奉仕規範	3.08(1.53)	3.18(1.40)	2.79(1.34)	3.12(1.67)	1.95	

*** $p < 0.001$ 1部:1部所属選手 2部:2部所属選手 3部:3部所属選手

3 社会的アイデンティティ

(1) 男子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目の得点

社会的アイデンティティ各項目について男子競技水準別とその全体の平均値を表3・図1に示した。社会的アイデンティティ各項目を競技水準別に一要因分散分析を行った結果、「のろまな」、「無責任な」、「不真面目な」、「やさしい」、「不安定な」、「意志の弱い」、「勇敢な」の7項目において有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表3に示したような有意な差がみられ

た. 阿江ら (2006) は競技成績が低ければ集団帰属意識も低下する傾向が推定できるとしている. 今回の研究では1部・2部は評価が高く集団帰属意識が高いことが推定できる.

表3 男子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目得点とF値

点.()内標準値

社会アイデンティティ	全体 (n=314)	1部 (n=61)	2部 (n=112)	3部 (n=73)	7-8部 (n=68)	F値	多重比較の結果
さわやか	4.11(1.69)	4.38(1.59)	4.01(1.63)	4.25(1.56)	3.76(1.93)	1.62	
正義感が強い	4.63(1.62)	4.95(1.52)	4.47(1.51)	4.47(1.68)	4.38(1.74)	1.60	
のろまな	4.75(1.67)	4.62(1.67)	4.87(1.57)	4.60(1.59)	4.31(1.77)	3.72*	1部<7・8部
面倒見のよい	4.54(1.52)	4.62(1.51)	4.43(1.44)	4.60(1.51)	4.56(1.67)	0.30	
無責任な	4.73(1.63)	5.15(1.70)	4.84(1.39)	4.30(1.69)	4.30(1.74)	3.38*	1部<3部
不真面目な	4.89(1.71)	5.38(1.62)	4.91(1.51)	4.34(1.75)	4.00(1.89)	4.37*	1部<3部
やさしい	4.53(1.53)	3.89(1.69)	4.57(1.30)	4.79(1.43)	4.74(1.66)	4.94**	1部<3部・7・8部, 1部<2部
暗い	5.26(1.67)	5.52(1.69)	5.31(1.55)	5.27(1.56)	4.91(1.87)	1.54	
たくましい	4.37(1.56)	4.74(1.67)	4.37(1.43)	4.22(1.51)	4.19(1.67)	1.65	
穏やかな	3.84(1.42)	3.42(1.62)	3.84(1.23)	4.00(1.34)	3.96(1.55)	1.47	
辛抱強い	3.80(1.64)	4.21(1.68)	3.84(1.53)	3.42(1.65)	3.78(1.66)	2.64	
心のせまい	4.57(1.73)	4.66(1.79)	4.58(1.58)	4.89(1.80)	4.49(1.78)	1.08	
不安定な	3.91(1.81)	4.49(1.54)	4.03(1.68)	3.66(1.93)	3.46(1.93)	4.28**	1部<7部, 1部<3部
意志の弱い	4.36(1.72)	4.98(1.66)	4.37(1.58)	4.21(1.77)	3.96(1.88)	4.21**	1部<7部, 1部<3部
素直な	4.72(1.53)	4.31(1.50)	4.19(1.44)	4.12(1.60)	4.51(1.58)	0.91	
信頼できない	4.72(1.62)	5.05(1.68)	4.80(1.55)	4.44(1.53)	4.59(1.70)	1.84	
うそつき	5.03(1.63)	5.34(1.63)	4.88(1.62)	4.85(1.69)	5.16(1.54)	1.50	
勇敢な	4.16(1.14)	4.67(1.49)	4.00(1.20)	3.97(1.47)	4.16(1.49)	3.65*	2部・3部<1部
きちんとした	4.41(1.67)	4.56(1.73)	4.56(1.50)	4.15(1.76)	4.32(1.74)	1.11	
つめたい	4.97(1.66)	5.18(1.63)	4.92(1.62)	4.84(1.62)	4.61(1.77)	0.53	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ 1部:1部所属選手 2部:2部所属選手 3部:3部所属選手 7部:7部所属選手 8部:8部所属選手

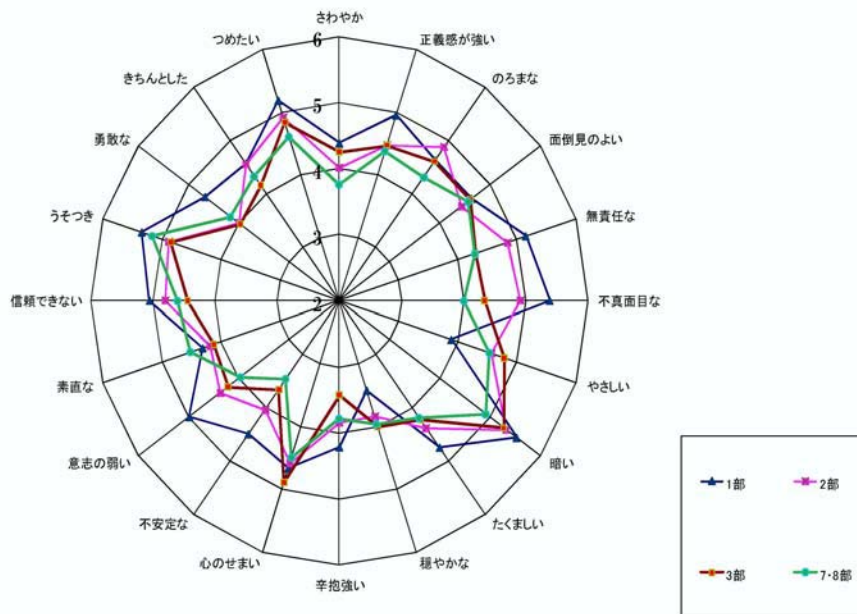


図1 男子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目の平均得点の比較

(2) 女子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目得点の比較

社会的アイデンティティ各項目について女子競技水準別とその全体の平均値を表4・図2に示した。社会的アイデンティティ各項目を競技水準別に一要因分散分析を行った結果、「穏やかな」、「不安定な」以外の18項目において有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表4に示したような有意な差がみられた。1部所属選手は2部・3部所属選手よりも評価は高く集団帰属意識は高いことが推定できるが、2部所属選手が3部所属選手よりも低い評価をしたため1～3部間での競技水準との関係は明確にはならなかった。

4 各権限構造型における運動部の集団規範

(1) 男子各権限構造型における運動部の集団規範

集団規範尺度について各運動部の権限構造型の平均値を表5に示した。規範5因子を権限構造型別に一要因分散分析を行った結果、すべての規範因子において有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表5に示すような有意な差が見られた。丹羽(1980)は主脳型・部員型の規則の遵種度について「よく守られているか普通」に対して部員外型は「非常によく守られているかよく守られている」としている。今回の研究でも男子運動部においては、部員外型の規範は厳しいことがわかり、集団規範に指導者(監督・コーチ)の存在が影響していると考えられる。

(2) 女子各権限構造型における運動部の集団規範

集団規範尺度について各運動部の型の平均と標準偏差を表6に示した。規範5因子を各権限構造型別に一要因分散分析を行った結果、「生活規範」以外において有意な主効果がみられた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、表6に示すような有意な差がみられた。女子運動部においては、部員外型は目立って高い値を示すことはなく、部首脳型・部員内首脳型・部員型にも高い値を示す規範因子がみられた。見正(1994)は「キャプテン・副キャプテン・マネージャー・上級生は、チームにおいて指導的役割を果たすとともに、他のチームに対して代表者としての機能を果たさなければならない。チームに悪影響を及ぼすことがないように指示している」と述べている。このことから女子運動部においては、監督・コーチと同じくらいキャプテン・副キャプテン・マネージャー・上級生の存在が影響していると考えられる。

5 現代と90年代の集団規範の比較

現代と90年代の集団規範尺度得点の平均と標準偏差を表7に示した。なお、90年代の集団規範は金(1992)の研究における値を参考とした。そして先行研究での競技レベル上位群の集団規範と今回の研究における男子1～3部所属選手、女子1部・2部所属選手を比較した。集団規範5因子別にt検定を行った結果、「態度規範」・「上下序列規範」・「奉仕規範」の3つの規範因子において現代が90年代に対して有意に高い値を示した。「体罰・しごき」などが問題とされてきている現代では運動部における集団規範は90年代に比べ厳しくなくなっていると考えられる。しかし今回の研究では現代の運動部のほうが3つの規範因子において厳しいという結果を得た。このことから、90年代では当たり前とされてきたことが現代ではそうは思われなくなっていることが推測される。また、集団には、成員を集団規範に従わせる方向に、集団圧力が働いてくる。「90年代の若者」に比べ「現代の

表 4 女子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目得点の比較と F 値

点.() 内標準値

社会アイデンティティ	全体 (n=160)	1部 (n=53)	2部 (n=29)	3部 (n=78)	F 値	多重比較の結果
さわやか	4.71(1.47)	4.58(1.29)	4.03(1.68)	5.05(1.41)	5.69**	2部 < 3部
正義感が強い	5.20(1.61)	5.66(1.36)	3.96(1.64)	5.36(1.55)	12.70***	1部・3部 < 2部
のろまな	5.13(1.65)	5.72(1.31)	4.10(1.76)	5.12(1.65)	9.95***	1部 < 2部, 3部 < 2部
面倒見のよい	4.70(1.50)	4.53(1.37)	3.79(1.50)	5.15(1.41)	10.34***	2部 < 3部, 1部 < 3部
無責任な	5.54(1.50)	5.81(1.32)	4.31(1.69)	5.82(1.32)	13.92***	1部・3部 < 2部
不真面目な	5.87(1.42)	6.23(0.95)	4.45(1.64)	5.95(1.33)	19.51***	1部・3部 < 2部
やさしい	4.83(1.43)	4.30(1.39)	4.55(1.33)	5.28(1.36)	8.86***	1部 < 3部, 2部 < 3部
暗い	5.86(1.38)	5.79(1.34)	4.97(1.64)	6.25(1.14)	10.43***	1部 < 2部, 3部 < 2部
たくましい	4.81(1.42)	4.92(1.30)	4.10(1.32)	5.00(1.47)	4.67*	2部 < 3部, 2部 < 1部
穏やかな	3.83(1.33)	3.77(1.42)	3.48(1.45)	3.99(1.21)	1.58	
辛抱強い	4.43(1.46)	4.64(1.51)	3.79(1.35)	4.51(1.41)	3.57*	2部 < 1部
心のせまい	5.39(1.60)	5.49(1.40)	4.59(2.08)	5.61(1.44)	4.77*	3部 < 2部, 1部 < 2部
不安定な	4.51(1.77)	4.83(1.48)	4.45(2.10)	4.32(1.81)	1.34	
意志の弱い	5.23(1.63)	5.40(1.46)	4.55(1.94)	5.37(1.57)	3.17*	3部 < 2部
素直な	4.63(1.42)	4.45(1.39)	4.21(1.26)	4.91(1.45)	3.31*	
信頼できない	5.58(1.55)	5.81(1.29)	4.55(2.06)	5.81(1.35)	8.53**	1部 < 2部, 3部 < 2部
うそつき	5.82(1.48)	6.00(1.24)	4.86(2.15)	6.05(1.17)	8.09**	1部 < 2部, 3部 < 2部
勇敢な	4.31(1.29)	4.49(1.10)	3.62(1.45)	4.44(1.28)	5.32*	2部 < 1部・3部
きちんとした	4.91(1.38)	5.15(1.18)	4.07(1.58)	5.06(1.31)	7.25**	2部 < 1部・3部
つめたい	5.48(1.60)	5.32(1.50)	4.52(1.84)	5.94(1.39)	9.65***	3部 < 2部

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$ 1部:1部所属選手 2部:2部所属選手 3部:3部所属選手

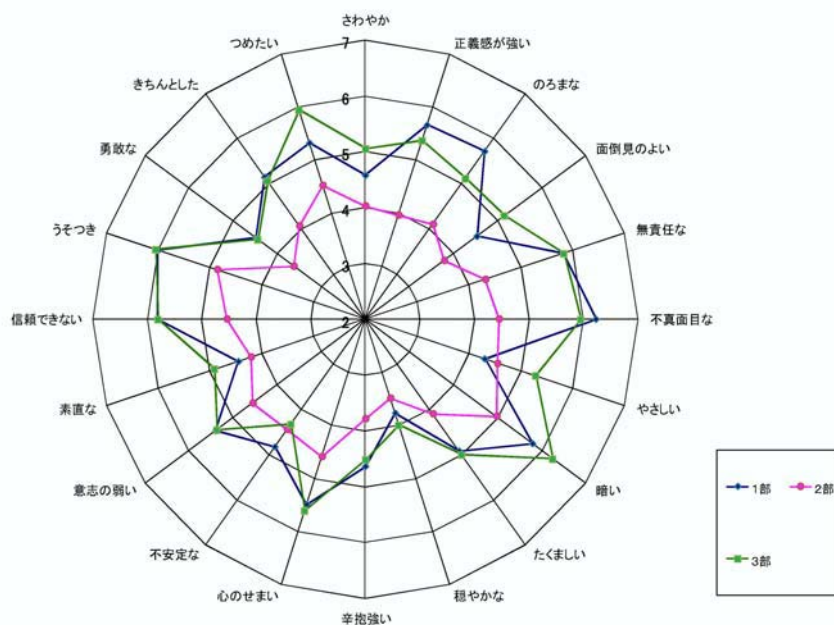


図 2 女子競技水準別にみた社会的アイデンティティ各項目平均得点の比較

若者」はこの集団圧力を「厳しい」ととらえがちであるとも推測できる。これは、「現代の若者」において規範に対する耐性の低下が原因であると考えられる。

表 5 男子各権限構造型における運動部の集団規範尺度得点の比較と F 値

型	部員外型	部主脳型	部員内主脳型	部員型	F 値	多重比較の結果
	(n=85)	(n=139)	(n=54)	(n=34)		
態度規範	3.72(1.33)	3.48(1.35)	3.35(1.38)	3.06(1.35)	25.99***	部主脳型・部員内主脳型・部員型 < 部員外型, 部員型 < 部主脳型, 部員型 < 部員内主脳型
業績規範	3.70(1.15)	3.64(1.17)	3.43(1.33)	3.53(1.23)	4.23*	部員内主脳型 < 部員外型, 部員内主脳型 < 部主脳型
生活規範	3.79(1.29)	3.73(1.28)	3.21(1.48)	3.21(1.38)	17.89***	部員内主脳型・部員型 < 部員外型・部主脳型
上下序列規範	2.63(1.38)	2.28(1.34)	2.35(1.34)	2.28(1.32)	5.26**	部主脳型 < 部員外型
奉仕規範	3.62(1.45)	3.65(1.46)	3.10(1.52)	2.85(1.60)	11.97***	部員内主脳型・部員型 < 部員外型・部主脳型

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表 6 女子各権限構造型における運動部の集団規範尺度得点の比較と F 値

型	部員外型	部主脳型	部員内主脳型	部員型	F 値	多重比較の結果
	(n=19)	(n=89)	(n=24)	(n=26)		
態度規範	3.20(1.36)	3.06(1.39)	3.24(1.44)	2.89(1.43)	3.74*	部員型 < 部員内主脳型
業績規範	3.60(1.21)	3.57(1.25)	3.90(1.22)	3.94(1.06)	6.50***	部主脳型 < 部員内主脳型・部員型
生活規範	3.35(1.47)	3.57(1.25)	3.57(1.37)	3.61(1.45)	0.88	
上下序列規範	2.01(1.10)	3.51(1.37)	1.88(1.15)	1.63(1.11)	99.37***	部員外型・部員内主脳型 ・部員型 < 部主脳型
奉仕規範	2.54(1.50)	1.88(1.09)	3.13(1.68)	3.38(1.56)	40.90***	部主脳型 < 部員内主脳型・部員型, 部主脳型 < 部員外型, 部員外型 < 部員型

* $p < 0.05$ *** $p < 0.001$

表 7 現代と 90 年代の集団規範尺度得点の比較と t 値

	現代 (n=328)	90 年代 (n=129)	t 値
態度規範	3.54(1.33)	3.10(0.93)	4.00**
業績規範	3.63(1.22)	3.68(0.65)	0.56
生活規範	3.44(1.44)	3.32(0.81)	1.12
上下序列規範	2.37(1.32)	2.10(0.47)	3.22**
奉仕規範	3.56(1.45)	2.65(0.99)	7.67**

** $p < 0.01$

V 結論

本研究では、関東大学バレーボール連盟に加盟している男女 1-3 部・男子 7・8 部の選手を対象とし、大学における運動部活動(バレーボール)の練習場面における現代の集団規範の実態を把握するとともに、競技水準によってどのような違いがあるか、また 10 年前の選手の集団規範と比較することによって今日の選手の特徴を明確にすることを目的とした。その結果以下のような結論を得た。

1. 男子集団規範尺度得点において、1 部・2 部所属選手が 7・8 部所属選手に対してすべての規範因子得点で高い傾向を示した。このことから、競技水準が高いほうが規範は厳しいことが示唆された。
2. 男子社会的アイデンティティ各項目得点において、1 部・2 部所属選手が 7・8 部所属選手よりも高い評価が得られた。このことから競技水準の高いほうが集団帰属意識は高いことが示唆さ

れた。

3. 男子運動部では「部員外型」・「部主脳型」において、各集団規範因子が高い値を示す結果となった。これより、集団規範の厳しさには監督・コーチといった指導者が影響していることが考えられる。
4. 女子運動部ではすべての権限構造型において、各集団規範因子で高い値を示すものがあった。これより、集団規範の厳しさには指導者と同じくらいキャプテンを中心とした上級生が影響していることが考えられる。
5. 90年代と現代の集団規範の比較において、「現代の選手」が3つの規範因子で高い値を示した。このことから「現代の選手」において規範に対する耐性が低下している可能性があることが示唆された。

参考文献

- [1] 阿江恵美子・遠藤俊郎・三宅紀子(2006) スポーツ集団の社会的アイデンティティについて—高校と大学の集団イメージの違い—。日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集 192-193.
- [2] 青柳靖夫(1980) 集団規範と同調行動—1—。拓殖大学論集 131:25-43.
- [3] 江幡健士(1983) スポーツ集団機能に関する研究—2—モラル凝集性およびリーダーシップと生産性について。千葉商大紀要 20(3):91-114.
- [4] 蜂屋良彦(1979) 新・教育心理学事典・衣田新(編)。金子書房 386-387.
- [5] 長谷川美恵子・松田岩男(1979) スポーツチームの集団凝集性と Athletic Performance に関する研究 (I)—特に volleyball について—。東京体育学研究 (6):3-5.
- [6] 柿本敏克(1997) 社会的アイデンティティ研究の概要。実験社会心理学研究 37(1):97.
- [7] 金明秀(1992) 運動部における集団規範の研究。スポーツ心理学研究 19(1):11-17.
- [8] 牧野剛(2003) 河合塾講師—若者はどこへ行くのか—日本の若者の決定的な変化の様相。
<http://www.kawai-juku.ac.jp/bunkyou/4-7.html>.
- [9] 松井匡治(1988) 体育心理学。建帛社 161.
- [10] 見正秀基(1994) 運動部集団の雰囲気と凝集性について (I)。追手門学院大学文学部紀要 (29):241-267.
- [11] 二宮恒夫(1979) 運動部集団の凝集性に関する研究。武蔵川女子大学紀要体育編 (27):1-9.
- [12] 丹羽劭昭(1966) 運動部の構造と機能。奈良女子大学文学研究年報 (9):93-115.
- [13] 丹羽劭昭(1972) 運動部の集団魅力調査項目の作成。大段員美・竹内京一・丹羽(編), 体育集団の研究—浅井浅一教授停年退官記念文集— 335-358.
- [14] 丹羽劭昭(1980) 運動部集団の構造と機能。松田岩男(編)『運動心理学入門』, 大修館書店.

- [15] 丹羽劭昭・東山千鶴子 (1967) ソシオメトリーによる運動部の凝集性の検討. 体育学研究 12(4):226-236.
- [16] 大石千歳 (2003) 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究. 風間書房.
- [17] 竹村昭 (1976) 体育心理学研究－身体運動の心理学－. 杏林書院 185.
- [18] 竹村昭・丹羽劭昭 (1965) 運動部集団とパーソナリティーの関係について (I). 体育学研究 9(2):9-17.
- [19] 竹村昭・丹羽劭昭 (1967) 運動部のモラルの研究 (1). 体育学研究 12(3):77-83.
- [20] 竹村昭・丹羽劭昭 (1972) モラル調査項目の作成. 大段員美・竹内京一・丹羽 (編), 体育集団の研究－浅井浅一教授停年退官記念文集－ 376-387.
- [21] 山岸明郎 (1975) 運動部のモラルに関する研究－高校男子バレーボールの戦績差から見たモラルの推移－. 桜門体育学研究 (10):7-13.
- [22] 屋敷要 (2005) 炎のファーム日誌. http://www.giants.jp/G/person/yashiki/person_11_62.html.
- [23] 吉田学 (2005) 月刊シリエズ編集部 SYRIEZ ONLINE. <http://www.accs-c.com/syriez/archives/2005/06/inDex>.